第１部

❏ オペラ座の怪人　A. L. Webber, M. Batt, R. Stilgoe ／武藤理恵　編

パリ・オペラ座の地下に住み着く、醜い顔ではあるが音楽の才能豊かな怪人。彼は若く美しい歌手クリスティーヌに恋をし、彼女を自分の物にしようとします。一方、劇場支配人ラウルは脅える彼女の肩をそっと優しく抱き、「僕が君を怪人の夜の闇の世界から救い出し、光の輝く自由な世界へと導いてあげるよ。」と力強く言うのです。

❏ マンドリン酒場の夜　湯淺　隆／吉田剛士　編

思いのほか雨が強く降ってきた。足元を気にしながら重く歩くその先に、ふと目にした酒場の扉。中から心地よさげな音楽が聴こえてくる。誘われるままに扉を開けると・・・・・。　垢ぬけていながらどことなくレトロな店内と軽快な音楽、そしてそこに集う客人達のたわいもないおしゃべりがあちらこちらに飛び交います。マンドリンを愛する人々が集い、飲み、談笑する酒場をイメージした作品です。

❏ 舞い落ちてきた天使　～遠い国の同じ痛み～　Black Rain　吉田剛士

本曲は吉田氏が作曲し湯淺氏が題名を付けた合奏曲ですが、この曲に湯淺氏が歌詞を付けた女性合唱版もあります。歌詞の冒頭を紹介します。

「焼け焦げた　戦場の街　舞い落ちてきた天使　血潮に染まる　翼のわけさえ　知るすべもなくて」

戦争に対する大いなる怒り、慟哭が伝わってくる作品です。

❏ グリーンスリーブス　イングランド民謡／武藤理恵　編

この曲は伝統的なイングランドの民謡で、原曲については作者不詳となっています。武藤理恵氏編曲により、この作品はドラマティックな作風に仕上がっています。主旋律が 1st マンドリンからマンドラ、マンドチェロへと移り、それと共に速度が次第に加速していきます。曲半ばからは全パートが激しく力強く歌い上げ、それもいつの間にか静まり返った後には、1st マンドリン、ギター、ベースによるエンディングへと向かいます。

❏ アニー・ローリー　Alicia Scott ／武藤理恵　編

「アニー・ローリー」は 1700 年頃にウィリアム・ダグラスによって詩がつくられ、後年ジョン・スコット夫人が作曲をしたものです。ウィリアムは美しい娘アニーと恋に落ちますが、時はちょうどスコットランド内戦の時代。親同士の政治的な理由等により、２人の恋は実らず、結局２人は別々の人をパートナーに選び、生涯を終えています。

この曲の美しい旋律は日本でもお馴染みで、NHK 連続テレビ小説「マッサン」の中で、娘のエマが大事なお客様の前で歌い上げる場面が記憶に新しいところです。

❏ Desert Rose デザート ローズ　武藤理恵

妖しげに始まるギターの前奏は砂漠に眠るバラを呼び起こします。眠りから覚めたバラは一夜限りの美しい花を咲かせます。人知れず・・・・。バラは自分が何者であるのか、どうしてここにいるのか、どんな速さで時が流れているのか全く分からないのです。しかし冴え冴えとした月夜に一人でいることが、何か幸せな楽しい心持ちに思えてくるのです。

通称「砂漠のバラ」と呼ばれるデザートローズは、ミネラルをたくさん含む砂漠の湖で鉱物の成分が乾燥して結晶化されるときにつくられるといいます。ある月夜の晩、鉱物のバラは夢をみたのでしょうか。

第２部

❏ メキシコ組曲　Eduardo Angulo（エドゥアルド・アングロ）

アングロ（1954～　）はメキシコに生まれ、オランダでバイオリンと作曲を学び、室内楽や合唱、管弦楽などを数多く発表しています。本曲は民族舞曲集としてメキシコ独特のリズム・色合いを持つ５曲で構成されています。

第１曲「コリマ風ハラベ」
第２曲「セレナータ」
第３曲「クリオーリョのウァパンゴ」
第４曲「ワルツ」
第５曲「ポルカ」

メキシコは 1821 年までスペインの植民地だったため、西洋の影響を大きく受けています。メキシコの踊りと一口に言っても西洋から伝わった踊りにそれぞれの地方の文化的要素が付加されて、様々なものがあります。

「コリマ」は一地方の名称で、「ハラベ」とは、オアハカ地方の部族発祥の感情豊かな踊りのことです。

「セレナータ」はドイツから伝えられた、鮮やかな色彩が感じられる曲です。

「ウァパンゴ」はベラクルス地方に伝わる舞踊曲で、「木の舞台の上でダンスする」という意味を持ち、6/8, 3/4 拍子が入り混じった多様なリズムを持っています。「クリオーリョ」とは、ラテンアメリカのヨーロッパ植民地でスペイン人やポルトガル人を親として生まれた人々のことです。

「ワルツ」はオーストリアから、「ポルカ」はチェコから伝えられたの民俗舞曲で、メキシコの人たちの陽気さが伝わってくる楽しい曲です。

それぞれの曲が皆特徴的で、楽しそうに踊るメキシコの人々の情景が浮かんできます。

中には『あ、これ聞いたことある』という耳慣れたフレーズも・・・

❏ 間奏曲　Salvatore Falbo（サルヴァトーレ・ファルボ）

サルヴァトーレ・ファルボは 1872 年にシチリア島のアヴォラに生まれ、ベッリーニ音楽院で学び、管弦楽曲オペレッタなどを作曲。マンドリンオーケストラ曲の代表作に組曲「田園写景」、序曲ニ短調、組曲「スペイン」、叙情的間奏曲、ジプシー風セレナータがあります。

本曲は第一次世界大戦中の 1916 年に出版され、日本においてはオルケストラ・シンフォニカ・タケ丼の第 19 回演奏会（大正 15 年 5 月 29 日）で発表されています。（初演か否かは未確認）

間奏曲とは、本来幕間に演じられる軽い娯楽的な曲です。本曲は独立した作品ですが、憂いに満ちた、たゆたうような旋律が親しみやすく、第２部演奏の中間を担うのにはうってつけです。

［参考文献：岡本光玉氏によるサルヴァトーレ　ファルボとマンドリン音楽］

❏ IL VOTO イル ヴォート　～ロマン的幻想曲「誓い」　Ugo Bottacchiari（ウーゴ・ボッタキアリ）

ウーゴ･ボッタキアリ（1879～1944）はイタリア東部のマチェラータに生まれ、同地の工業高校で数学と測地法を学びましたが馴染まず、幼少より好んでいた音楽に傾倒。ロッシーニ音楽院でピエトロ・マスカーニ（歌劇カヴァレリア・ルスティカーナで著名）に師事し、在学中に作曲した歌劇「影」の上演で成功を収めています。

マンドリン合奏のための作品としては「交響的前奏曲」「夢！うつつ！」「夢の魅惑」等があります。

本曲は、1901 年イル・プレットロ誌主催の作曲コンクールにおいて S. ファルボ作曲の「田園写景」とともに第１位に選ばれたものです。

作者が本曲で描かんとしたのは恋愛への熱烈な欲求だと言われています。その美しい旋律、重厚な和音は深刻な心の訴えを聴く者の胸に投げかけてきます。低音パートの底から湧き出るような主題に各パートが加わり、次第に厚みを増して一気に高音部へと上昇していく導入部は抑えきれぬ感情の高まりを表しているかのようです。

マンドリン曲を数多く手掛けているボッタキアリの作品中で最もロマンティックな旋律のためか、多くの楽団で演奏されています。